

長塚圭史さん 『江戸生艶氣蒲焼』習作戯曲

長塚さんは、数回にわたるワークショップのなかで、江戸時代に活躍した戯作者・山東京伝（二七六一〜一八一六）の黄表紙（きびょうし）と出会いました。

黄表紙とは、江戸時代、それも約三十年間（安永四〜文化三年（一七七五〜一八〇六）という非常に短い期間に出版された大人向けの絵入読み物です。

長塚さんは、（如何にして黄表紙と演劇は出会うことができるか）をテーマに、数人の俳優や江戸時代文学の専門家と一緒にワークショップを続けていらっしやいます。この習作戯曲は、二〇一八年十二月十四日・十五日・十七日に行ったワークショップのために書き下ろしたもので、山東京伝の黄表紙『江戸生艶氣蒲焼』がモチーフとなっています。

※『江戸生艶氣蒲焼』

黄表紙。上中下三冊、全十五丁。山東京伝作画。天明五年（二七八五）刊。蔦屋重三郎刊。本作は当時非常に人気を博したといわれ、主人公の艶二郎（えんじろう）の特徴的な鼻は、後に作者京伝の自画像に多用されたことで、「京伝鼻」として親しまれました。

『山東京傳全集』黄表紙1（ぺりかん社、一九九二年）などに活字が備わっていますので、関心を持たれた方は、是非原作にも触れてみてください。



新内節の正本を眺める艶二郎。
画像の引用は『山東京傳全集』より。

『江戸生艶氣蒲焼』習作戯曲

艶二郎がフルーツを突きつつ、新内節の正本あるいはanzenなどを読みながら、つついっし身を乗り出してゆく。

艶二郎

(かなり興奮して) こういう身の上になったら、さぞ面白かろう。良い月日の下で生まれた手合だ。

北里喜之助、悪井志庵がやってくる。

艶二郎

なあ、どこかにとんでもなく浮名の立つ仕打が、ありそうなものだ。

喜之助

まず、めりやすというやつが、浮気にするやつさ。

艶二郎

めりやす？

悪井

つまり歌謡曲。

艶二郎

歌謡曲？

悪井

流行歌さ。

艶二郎

(得心して) 流行歌。なるほどねえ。

喜之助

流行りはやっぱり知らねばなりやせん。およそ人の知った、口近ひめりやすの分、小口のところを申しやしやう。まづ、雉子、

悪井

無間、

喜之助

盃、

悪井

時酒、

喜之助

艶の月、

悪井

三つの鳥、

喜之助・悪井

三つ蒲団。

艶二郎

(想像を膨らませて) 三つ蒲団……。

喜之助

二つ紋、

悪井

四つの袖、

喜之助

禿立、

喜之助・悪井

朝顔。

艶二郎

(メモをしながら) ふむふむ。

喜之助

(ここからはもうじゃんじゃん相手を持たずに) 業平、白糸、指切り、昔

草、十三鐘、稲船、別れ、仮枕、春の夜、十寸鏡、紅葉、朧月、乱れ鳥、

明烏、花の宴、恋桜、二つ文字、我が心!

悪井

(喜之助と同時に張り合うように出来るだけ早く) 康秀、ひとり心中、入

黒子、万年草、水鏡、待つ宵、名残の紅葉、夏衣、秋の夜、夜半の鐘、春

艶二郎 霞、思い川、村鳥、残る暑さ、秋の七草、左文字、江戸浴衣！
喧嘩しないでね。

喜之助 まだいつくらかもあれど、ちょっとしたところが、このくらいなものさ。

悪井 ああ、口が酸くなった。

艶二郎 指切り、入黒子、待つ宵、別れ。

悪井 気に入ったのがありましたかな。

喜之助 文の文句にもだいぶ伝授がある。

悪井 例えば文を出すときには、はしを折り曲げておこなきや互いの仲が切れる
と言います。

喜之助 その文の終わりに、まさか本名を書くようなことになると、ことが面倒に
なる。

艶二郎 どういうこと？

悪井 入れ込み過ぎというやつでしょう。

喜之助 それからこう引裂き目に口紅の付いているのは、いつでも地者の文ではね
えのさ。

悪井 素人の手紙じゃないってこと。

艶二郎 ああ文の口に紅をこうしてね。

喜之助 耳の脇に枕だこのあるのも、商売上がりとすぐに知れる。

悪井 文の話じゃもうないね。

艶二郎 枕だこなら商売上がり。うんうん。

艶二郎は大いに感心して、立ち上がると歩き出す。

艶二郎 指切り、入れ黒子、待つ宵、別れ・・・入れ黒子！

艶二郎は早速着物を脱いで、刺青を入れてもらう。

艶二郎 痛い痛い痛い痛い。痛いな。

彫り師 じゃやめんのか？

艶二郎 やめませんよ。痛い痛い痛い痛い。え？ ここにもしますか？

彫り師 やめんのか？

艶二郎 やめねえよ。痛い痛い痛い痛い。

あ。

なに？

中にちと消えかかった名前もなくて悪いから、後でまた灸を据えましょ
う。

艶二郎 ええ？ まだ彫るんですか？？ 色男になるも、とんだ辛いもんだ。

一方、悪井志庵はおゑんの元へ。

おゑん
なんだって？

悪井
いやいや、これが頼みの、ともかくも、おあやかり申して、ちと艶二郎が
出世の筋立てさ。

おゑん
駆け込むばかりなら、随分承知さ。

おゑんは忽ち艶二郎の家へ駆け込んで、扉を叩く。

おゑん
ちよつと開けなさいよ。ちよつとこれ開けなさいよ！

家内の下女ども何事かと覗き見ている。

下女1
うちの若旦那に惚れるとは、千家か遠州か知らぬが、とんだ茶人だ。

おゑん
開けなさいって！ 開ける！

弥次右衛門
はいはいはいはい。

弥次右衛門、その妻、そして候兵衛がやって来る。

おゑん、飛び込んで来て。

おゑん
みづからと申は、そも、寄辺定まらぬ転び妻、この新道に住み慣れて、人の心を浮気にする、白拍子でござんす。茅場町の夕薬師でこちらの、こちらの、えーつとこちらの、

悪井
(隠れて小声でおゑんの台詞を助ける) 艶二郎。

おゑん
艶二郎さんを、植木の陰から見初めました。女房にすることならずば、おまんまなど炊いても、おまんまなど炊いても、

悪井
おりたいのさ。

おゑん
おりたいのさ。そう。おまんま炊きでもいいからここにおりたいのさ！
それもならぬとおっしゃれば、死ぬ覚悟でござります。

候兵衛
若旦那のあのお顔では、よもやこふいふ事はあるまいと思つたに。

弥次右衛門
うん。これお女中、間違ではないかの。

悪井
泣いて。

おゑん大袈裟に悲しそうに泣く。陰から艶二郎もワクワク見ている。

艶二郎
ハテ色男といふものは、どんな事で難儀をしよふか知れぬものだぞ。(小声)

でおゑんに声を掛ける）なあ、もし。もふ十両遣るふから、モチつと大きな声で、隣辺りへ聞こへるやうに。

おゑん

艶二郎さんを！ 植木の陰から見初めました！ おまんま炊くのもならぬとおっしゃれば！ 死ぬ覚悟でござります！

おゑんは大仰に号泣。

艶二郎大喜びして往来へ。

しかし通りを行き交う人々は艶二郎に見向きもしない。

風が吹いている。

艶二郎は通りかかった読売を捕まえて号外の束を渡して一両をやる。

おゑんもう一声豪勢に泣いて。

読売

評判評判！ 仇気屋の息子艶二郎といふ色男に、美しい芸者が惚れて、実家へ駆け込みました。とんだ事とんだ事！ こと明細明細。紙代板行代に及ばず、タダじゃタダじゃ！

「読売が大きな声で触れ回る間に、艶二郎は次々と通行人に一両を渡す。忽ち。

読売二

評判評判！ 仇気屋の息子艶二郎といふ色男に、美しい芸者が惚れて、実家へ駆け込みました。とんだ事とんだ事！ タダじゃタダじゃ！

通りがかりの女

なにさ、みんな拵え事さ。タダでも読むが面倒でござんす。（と鼻をかんで捨ててしまう）

読売三

（重なるように）評判評判！ 仇気屋艶二郎が芸者になって駆け込んダ。とんだ事とんだ事！ タダじゃタダじゃ！

艶二郎は期待して往来をゆく。くしゃみを一つ。街を見回す。誰も艶二郎に見向きもしない。くしゃみをもう一つ。けれどやっぱ見向きもせずに皆行ってしまうのだ。

喜之助

このうえは、女郎買いを始めて、浮名を立てん。

艶二郎

ああ、もうそうしよう。

喜之助、悪井志庵とオシヤレに着飾り連れ立って、中の丁浮気松屋へ。

しばしウキウキと待つ艶二郎。つい立ち上がるのを喜之助と悪井が止める。やがて浮名がやってくる。興奮する艶二郎。二人、ぐっと押さえ込んで。

喜之助 モシ花魁、お前をば世間で、とんだ手のある女郎だと申ます。
浮名 (笑って) 茶を言いなすんな、拝みんす。

と浮名は去ってしまふ。追いかける艶二郎だが二人に押さえ込まれる。これ
でいいこれがいいのだと。

艶二郎 ああ、ま、最初はね。花魁だものねそうだよ。しかし、こうして女郎買
いに出ても、家へ帰って焼餅を焼く者がなければ張り合いが無いね。
なるほど。

喜之助 焼餅さえよく焼けば、器量は望まないし。はいじや二百両。
艶二郎 二百両！

喜之助 いいんだよいいんだよ。はいこれはい。(と悪井と妾に分配する)

妾 (たちまち雇われたのか) 私をお抱へなされましても、大方女郎買や色事
で、私をお構いはなされませう！

喜之助 うまいね。
悪井 うまい。

艶二郎 しかしあの器量・・・あれ去年の春頃、中洲であたりで買った地獄では
ねえかしらん？

喜之助・悪井 いえいえいえいえ。

艶二郎 でもやつぱり浮名だよ。

喜之助・悪井 そりや浮名さんだよ。だってそのためのねえ。

喜之助 でも普通に通つてもつままないよ。

艶二郎 あ、まあね。

喜之助 かと言つて、間夫になろうつて言つてもねえ。

悪井 だってそれはもう前にダメだつて言われたでしょう。

喜之助 だからさ、お前が揚げ詰めて浮名さんを独り占めするじゃん。

悪井 えー、はいはい私だね。

喜之助 そんなで艶二郎は、あ、これいいんじゃないやね、艶二郎は、新人買いに来て、こ
っさり頼んで、お前の目を盗んで浮名さんと密会するつて言うストーリー。
わ、凝つてるけどそれ面白いスカ？

喜之助 だって普通はダメでしょ艶二郎くらいになると？

艶二郎 普通なんかはもう全然ダメだよ。ヘイトしてます普通。

悪井 でも浮名さん独占つて支払いやばく無いっすか？

喜之助 大丈夫だよ艶二郎が払うんだからね。

悪井 あ、ま、ま、ま、全部ね。私の分もね。え？ 大丈夫っすか？

喜之助 大丈夫だよ？

艶二郎 大丈夫だよ言つてんだよ。

悪井 わ、大丈夫なんでもんなあ。

喜之助 そうやって思いの外苦労するのがいいんだもんね。

艶二郎 この不自由なところが日本だ。

喜之助 あ、何、いいじゃん今の。もう一回言って。

艶二郎 この不自由なところが日本だ。

喜之助 いいね、これいいよね。

悪井 いいっすかね、どうっすかね。

艶二郎 (得意になって) この不自由なところが日本でい。

艶二郎隠れる。そしてあつちを覗いたりこつちを覗いたり。

つまらなそうに浮名が来る。

艶二郎

(大いに格好をつけて) 手前が俺がとこへ来ると、あつちらの悪井のお大尽がやけを起こして、遣り手や廻しを呼んで、小言をいふ内の心持ちのよさは、どう安くふんでも五、六百両が価値はあるのさ。

悪井 五、六百両!

浮名 ほんにぬしは酔狂な人でござりんす。

艶二郎は嬉しくて調子に乗っている。

悪井

しかしおれが役もつらい役だ。座敷のうちは大尽で、床がおさまると蒔絵のたばこ盆とおればかり。これも渡世と思へば腹もたたぬが、ふかふかの五つ蒲団に、錦の夜着で一人寝るだけ。ま、痔にはならねえか。

朝。小鳥が鳴いている。

禿が艶二郎を引っ張って来る。

艶二郎 これさあ離してくれろ!

禿 いいえ離しません! 帰ってください艶二郎さん!

艶二郎 離してくれる!

ダメです! このままじゃいつまでも花魁が離さなくなっちゃうんですから! 帰ってくださいいってば!

二人良きところで引っ張り合いをやめて。

艶二郎 うん。こう引きづられてはだいぶ外聞が良かった。はいこれ約束のね。

禿 はい、どうも。

と一両渡す。

妾が愚痴をこぼしている。

妾

ほんに男といふものは、なぜそんなに気強いもんだねへ。それほどに惚れられるが嫌なら、そんないい男に生まれ付かねえがいいのさ。また女郎も女郎だ。人の大事の男を留めおきくさつて。又お前さんもお前さんだ。あい、もう好きになすつたがいいのさ！・・・このぐらいでしようかね。

艶二郎

いやあ、生まれてから初めて焼餅を焼かれて、どふも言へねへ心持ちだ。なあ、モチっと妬いてくれたら、手前がねだった、八丈と縞縮緬を買ってやるふ。モチっとだけモチっとだけ。

浮名と仇気屋の紋を比翼紋に付けた提灯が点灯する。

キョロキョロとやって来る悪井志庵と北里喜之助

悪井

へえ。回向院道了権現さんのご開帳に、花魁浮名と旦那の紋付きの奉納提灯とはね。

喜之助

骨は繁骨、側は真鍮の金物。

悪井

方々の人気神社へ奉納したこの特製水手ぬぐいと言い、これまた豪勢なことだなあ。

喜之助

吉原の桜提灯と時期が被って難儀したぜ。

悪井

おや、二階からめりやすが。ありや当代きつての藤五郎がめりやす。

喜之助

見ろ、艶二郎だ。こりやまた何か仕込んだな。

悪井

艶二郎さんの周りに随分と気性の荒い地回りが、ひ、ふ、み、よ・・・あれ！

と言う間に艶二郎は数発殴られて大袈裟に倒れる。

地回り一

うぬが様ないい男がちらつくくと、女郎衆があだついてならぬゆえ、(メモを見て) おいらもちつと焼餅の筋だ」

艶二郎

(殴られた箇所を確かめながら) ああ、うん、うん、そういいね。いいんだけどね、その握りこぶしにや三分づつ付いているンダ。ちつとは痛くても良いから、モチつとこり見得の良いように、頼む頼む。

と地回りたち、仕方なくまた艶二郎を控えめに、しかし大ぶりで殴りつける。痛みを堪えながら、できるだけ派手に、そして見られている喜びを隠せずに殴られる艶二郎。

候兵衛

若旦那！ 若旦那！ やい、てめえら！ 失せやがれ！ 失せやがれ！

艶二郎

やあ候兵衛、その連中に、ほら一両づつやってくれ。

候兵衛

ええ？

艶二郎

いいんだ。いいんだ。

候兵衛 渋々払う。

候兵衛

こりや一体どういうことです？

艶二郎

それにしても候兵衛、世間の噂を聞くにだね、この艶二郎がどんなに素敵に浮気なことをしたってね、結局みんな金持ちゆえの道楽だと思われちゃってんだよね。

候兵衛

いや、それはだつて、まあそうさねえ。

艶二郎の実家。

弥次右衛門

今度は何を言い出すかと思つたら！

母

いえ、どうか、一人息子のことゆえに！

弥次右衛門

ならん！

艶二郎

ママ。

母

ならば七十五日が間の勘当にて、日限が切れれば、早々家へ引き取るところにしてみれば。

弥次右衛門

なに七十五日が日限の勘当と？

母

はい七十五日。

弥次右衛門

・・・勘当してくれと言うのだから是非もない。早く出て失せろ。

艶二郎

パパ！

弥次右衛門

いいから早く行け！

艶二郎

願ひ通りの勘当とや。有難い有難い。四百四病の病より、金持ちほど辛い

候兵衛

ものはないのさ。可愛い男はなぜ金持ちじゃやら。

候兵衛

若旦那の思し召し、もはや正気の沙汰とは思えませぬなあ。

独り身となった艶二郎。ウキウキと。

艶二郎

さて喜之助、なんぞ色男のする様な浮気な商売はないかのう？

喜之助

浮気な商売と言えば地紙売でしょう。勘当された二枚目放蕩息子と言えば

地紙売り。

艶二郎

違えねえ。

悪井
しかし地紙を売るのは夏の始めだ。
面白からやらしてやらうよ。

艶二郎
柳、やなぎで世を面白う
うけて暮らすが命の薬
梅にしたがひ、桜になびく

と艶二郎、季節外れの地紙を売り歩く。

女
オヤ、まるで鳥羽絵の様なおかしな顔の人が通る。みんな来て見なせえ。

女たちがクスクス笑いながら見物している。

艶二郎は粹に歩いて回るが、

艶二郎

外を歩くと、日に焼けるなあ。それにこの足の豆ときたら。困ったものだ。
(とクスクス笑いに気がついて格好をつけながら) おや、また惚れたそう
だ。色男もうるさいぞ。

ちよつと元気になってまた歩き出す。

艶二郎

その日その日の風次第
嘘もまこと義理もなし
若旦那、若旦那。

候兵衛
艶二郎
候兵衛

お、候兵衛だ。よお候兵衛。
若旦那、過ぎました七十五日の日限を、もう二十日だけ日延べしてもらい
ました。
ああ、よかつたよかつた。ああ嬉しい。

嬉しいじゃないですよ。次は何をしでかそうって言うんですか。あ、ちよ
つと若旦那！ 若旦那！

艶二郎は廓へ。

浮名

艶二郎
浮名

嘘心中だつて嫌ですよ。
でも嘘なんだよ。
嘘にしたつて外聞悪い。
でも本当の心中はダメって言うんでしょう。

浮名
艶二郎

当たり前でしょ。死ぬんだからね、心中つてね。
ねえもう身請けの千五百両は払ってるんだからね。

浮名 はいはい。

艶二郎 「南無阿弥陀仏」って唱えたところで、北里喜之助と悪井志庵が止められる算段さ。

浮名 (あてつける様なため息)

艶二郎 辞世の句もね、浮名が画いた蓮の絵を大奉書へ空刷りして吉原中に配っておいたし、揃いの小袖の模様には「肩に金てこ裾には碇、質に置いても流れの身」という古歌の心を染めこんだ。脇差は銀箔塗りのこれもちろん木刀ね。それに秋にはこの心中を元に浄瑠璃を作らせて人気役者で芝居にするよう頭金を座元に払ってきた。これ観に行くのは絶対楽しいじゃない？ところでこのまま一階から身請けするんじゃ普通だから二階から梯子を掛けて逃げることになってるからね。それじゃもう行こうかと思うんだけど。

禿 花魁、ご機嫌よふ、お駈落ちなされまし。

浮名を連れて艶二郎歩み出す。

往来を行くゆえ皆クスクスと笑っている。

やがて二人きりとなり。

艶二郎 じゃ、いいね？ いいよね？

浮名 (適当に二度ほど頷く)

艶二郎 (脇差をかざして) 南無阿弥陀仏。

と黒装束の泥棒二人現れ出でて、

泥棒(候兵衛) わいらはどうで死ぬものだから、おいらが介錯してやろう。

艶二郎 これこれ早まるまい。我々のこの心中は死ぬための心中ではない。ここへ丁度止め手が出るはずだ。どう間違ったかしらん。着物はみんなあげましょうから、命ばかりはお助けお助け。

泥棒(弥次右衛門) 以後、こんな思い付きは、せまいかせまいか。

艶二郎 もうこれに懲りぬことはございません。

浮名 どうでこんなことと思ひんした。

艶二郎と浮名は着ているものを脱いで、歩き出す。

この動作一連と裸の道行に合わせて。

朝に色をして夕に死すとも可なりとは、さても浮気な言の葉ぞ。

それは論語の堅い文字、

これは豊後の柔らかな、
肌と裸の二人して、
結びし紐を一人して、
解くに解かれぬ疑ひは、
ふしんの土手の高みから、
とんと落ちなば名や立たん。
どこぞの女郎衆かしらみ紐、
結ぶの神もあちら向かさんしよ醤油の焼きずるめ、
びんと乾反るも今ははや、
昔となりし中の丁、
外八文字もこふなれば、
内七文字に辿り行く。
涙に混じる水ばなに、
濡らさん袖は持たぬゆへ、
下たの帯をぞ絞りける。
身にしみわたる東風に、
鳥肌立ちし此の素肌、
殿御の顔は薄墨に、
かく玉草と見る雁に、
便りを聞かんと書く文の、
仮名で金てこ裾模様、
縁の色も七つ屋の、
名に流れたる隅田川、
互いに無理を五百崎の、
鐘は四つ目屋長命寺、
君には胸を明くる日の、
まだ四つ過の緋縮緬、
禪長き春の日の、
日高の寺にあらずして。
裸の手合急ぎ行。

艶二郎

浮名

俺はほんの酔狂でしたことだから是非がないが、そちはさぞ寒かろう。世間の道行は着物を着て最期の場合へゆくが、裸で実家へ道行とは、大きな裏腹だ。緋縮緬の禪が、妙に目立っちゃってこれおかしいよね。
ほんの巻き添えで、難儀さ。

家に帰ると、衣桁に小袖かけてあるゆへ、不思議に思ふおりから、弥次右衛

門と候兵衛、山東京伝が出てくる。

弥次右衛門

艶二郎はこれで初めて世の中を諦め、本当の人となり、浮名も息子の見てくれは我慢して、他へ行くでもなく夫婦となり……なるね。なってよね。

浮名

(適当に二度ほど頷く)

艶二郎

末繁盛に栄えるべく精進致します。ところでこれまでの浮名の立ち納めに、今までのことをこうして京伝先生が草双紙にしてくださいました。

弥次右衛門

こうしてっってどういうこと？

山東京伝

いや続けて続けて。

弥次右衛門

続ける？

山東京伝

いいからいいから。

弥次右衛門

……恐ろしき泥棒とまで身をやつせし我々が工夫の狂言、

艶二郎

(合点がいつて) ああ。

弥次右衛門

以後はきつとたしなみおれ。喜之助や悪井志庵とももう付き合うまいか。

艶二郎

もう付き合わない。付き合いません。

山東京伝

さてここで、

艶二郎

うん。さてここで焼餅を焼かれては大難儀だから、妾もどこぞへ片付けま

浮名

しよう。

浮名

わたしは大きに風邪を引きました。

おしまご。